

赤岩地区ツアーの参与モニタリング結果(速報)

報告者：適正利用・エコツーリズム WG 敷田麻実

2015 年 8 月 20 日

1 参与モニタリング概要

2015 年 7 月 29 日に行われた赤岩地区ツアーの赤岩地区訪問部分に同行して、赤岩地区での観光客の行動や関係者の対応を参与観察した。

2 ツアー計画概要(赤岩地区部分だけ紹介)

7:00 相泊港全員集合し相泊港出港、船外機移動・漁業活動見学

8:30 赤岩上陸・小倉番屋見学・長谷川番屋見学

10:30～11:40 移動

11:50～12:20 ルサフィールドハウス振り返り・アンケート記入

3 行程



図 1 全行程(行き)



図 2 先端部付近



図 3 赤岩地区拡大

4 環境へのインパクト



上陸地点は礫浜であった。そこから長谷川番屋まで約 200m 歩いて移動し、番屋内部を見学した。その後同じルートで伝馬船まで移動し、帰路も同じコースで相泊まで戻った。

なお大小便などは、事業者が携帯トイレを用意して持ち帰っていた。またガイドは 3 人同行し、行動についての事前の注意などは徹底していた。

5 評価

エコツアー戦略に従って提案され承認された内容のツアーを実施していた。植生については、既存の干場上を歩いているだけで、それ以外の植生への踏み込みはヒグマに対する注意喚起あり、認められなかった。なお、付近の植生はハマエンドウ、ハンノキ、エゾオグルマなどが卓越していた。

ツアーでは、往復ともコンブ漁の漁船に近づき、漁業者との会話とコンブ漁の見学を行っていた。一方、航行中にヒグマを3度見かけ、客の写真撮影のために陸に近づいた。その際の観光客の反応は際立っており、文化資源を対象としたツアーでありながら、自然資源に対する関心も高く、今後の文化資源ツアーへの課題だった。また事業者もそのことを承知しており、客のニーズは無視できない現状がある。

昆布番屋に対する関心は高く、建物よりも、昆布漁業史や産業振興に関心が高かった。ガイドの解説は十分興味・関心を惹いており、知床の自然だけではない文化の魅力が十分にあることを確認した。

なお、番屋は痛みが激しく、今後の連続使用に耐えうるか疑問であり、修繕や保全が必要である。番屋の建物は当時(明治期)のまま維持されているが、内部には最近1990年代の生活雑貨が多く残されており、その扱いを検討すべき。

現地では他の昆布漁業者との若干会話があった。また陸上経路でのトレッカーとの接触が1回、遠方からの目視が1回あった。接触したとレッカーからの不満はなかった。



(参考：提案の内容)

<p>目的</p>	<p>知床岬の先端部赤岩地区で行われている昔ながらの昆布漁に触れ、知床半島先端部において自然と共生しながら漁業を営んできた歴史・文化を学ぶ機会をエコツアーとして提供する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 本来の羅臼昆布漁の漁法・先人の苦労を学ぶ 2) 羅臼昆布漁の歴史を学ぶ 3) 知床岬先端部の暮らしについて学ぶ 4) 知床の自然の雄大さ・過酷さ・恵みについて学ぶ
<p>実施内容</p>	<p>○期間 7月15日～8月15日 (約30日)</p> <p>○場所 知床岬赤岩地区</p> <p>○催行者 観光協会員 (ガイド) が登録ガイドを随行し実施する。なお、ツアー催行について観光協会が掌握する。</p> <p>○対象 昆布を中心とした羅臼の人と自然のかかわりの歴史に関心がある人</p> <p>○ツアースケジュール (案)</p> <p>【当日】 相泊港出港</p> <p>船上で知床半島に関するレクチャー、ネイチャーウォッチング</p> <p>赤岩地区到着 昆布漁見学 船上でガイドが昆布漁を解説する</p> <p>赤岩地区礫浜に上陸</p> <p>昆布洗い・干し作業を見学、昆布番屋の紹介、ガイドによる解説</p> <p>赤岩地区で乗船・出港、相泊港へ帰港</p> <p>ルサフィールドハウスにて振り返り、情報提供</p>